文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

STUDENT TESTIMONIAL

荒田華凜さん（立命館宇治高等学校卒 2019年度卒）

2019年度、立命館宇治高等学校を卒業。現在はボンド大学（オーストラリア）２年生物医学部在学。
コロナ渦で渡航中止を余儀なくされる中、2022年5月に渡豪して留学中。

「高齢化社会が進む日本。オーストラリアで学ぶ再生医療を、認知症などに活かす研究で日本の医療に貢献したい。」

国際バカロレア (IB) 教育では、自分たちで問題について考えて、皆と一緒に導きだしていくのが楽しい。

幼稚園は、インターナショナルスクールに通い、小学校は、日本人としてのアイデンティティーを持ってほしいという親の意向で、地元の公立小学校へ行きました。それと同時に、帰国子女が通う土曜学校で英語力を持続していました。IB は、中学受験のための説明会の折に、立命館宇治の先生から、高校にそのプログラムがあるという話を聞いたことで興味を持ちました。日本の高校の卒業資格と世界共通の国際バカロレアの資格の両方を取れるのが魅力でした。幼い頃から母親と二人で海外に旅行へ行ったりしていたこともあり、海外に留学したいという夢があったので、英語で勉強できるという事も嬉しかった点です。

そして受験をし、無事に合格した後は、中・高と IB カリキュラム（準備コースを含む）で学びました。準備コースでは普通の教科は日本語で、社会、理科、数学に関しては高校の IB の先生が英語で教えてくださいました。この時に、よく先生に聞きに行ったり、友達に教えてもらったりと勉強の仕方を学んだ気がします。中１の夏休みには一人で飛行機に乗り、１か月間、ニュージーランドでの短期留学も経験しました。海外での出会いや勉強の環境は素晴らしく、ますます海外への本格的な留学への憧れが強くなっていきました。

高校における IB の選択科目としては、HL 教科を 数学、化学、生物、SL 教科には 日本語 A、英語 A、ビジネスを選びました。一番好きな教科は数学で、HL を取っていることもあり難しかったですが、楽しく勉強できました。先生の質問をみんなで話し合いながら解いていく。解けなくても、それを最終的に自分達で考えて導き出すというのが楽しかったのを覚えています。苦手な科目は 言語 A の日本語の授業でした。今まで、学んできた国語とは違う、自分の考えを表さなければいけない授業に苦労しましたが、違った学びができ、楽しくもあり、知らなかった発見もありました。

IBDP 生は、時には休む時間を作り、自分を上手に管理していくことも重要。

課題や TOK では、今まで考えた事がないような事を考えなければいけませんでした。これまでとは全く違う考え方をしなければならないと強く感じました。クラスメイトとディスカッションした時に、他の課題に手がつかなくなるくらい、考えすぎてしまったこともありました。

また、高校は IB コース以外の普通のコースもあるので、学校の文化祭が催されている雰囲気の中、自分は模擬 IB 試験の直前で参加できず、その中で勉強しなければいけなかった時は精神的にも難しさを感じました。そんな時、私は IB の勉強から少し離れて、程よく休憩したりしていました。１階の教室を出たらすぐ広いグラウンドがあるので、テストが一段落した時にそこに出て、IB 生の仲間たちとリラックスした時間や、自分を落ち着かせる時間を意識して作っていました。友達同士で「今日ちょっとしんどそうだね」とか、「休憩しようよ」などと、お互い

に思いやる仲間がいたのは心強かったです。

新型コロナウイルスの感染が拡大する状況下での大学進学。思い切った決断で１年休学し、ようやくオーストラリアへ。

海外留学への憧れから、オーストラリアの留学フェアにも行き、そこでボンド大学を紹介されました。この大学は他のオーストラリアの国立の大学に比べて規模が小さく、現地の学生からも人気のある大学です。少人数の講義で教授にも質問がしやすいと聞いて受験を決めました。３学期制で、努力すれば２年で学位がとれます。私は生物医学部（医学部の研究に特化した学部）で、同じ学部の生徒は学生の８割は医学部へ編入しますが、私は最初から研究がしたくて、編入せずに修士課程へ進みたいと思っています。

実は、高校卒業した年がコロナ渦の始まりでした。3月に卒業して、５月にオーストラリアへ出発する予定が、オーストラリア自体が受け入れを制限し、１年間行くことができませんでした。現地の学生たちがしている実験などを、画面越しに見ている状況が続き、精神的にもこれ以上長くは続かないと、思いきって１年休学をして、ようやく この５月にやっとオーストラリアに来ることができました。

この辛い期間を乗り越えられたのは、IB で一緒に学んだ仲間たちと話をしたり、両親が気にかけて外へ連れ出してくれたりしてくれたからだと思います。そして、IB で大変な時期を乗り越えていたからこそ、こういった状況でもそれほどネガティブな思いに囚われずにいられたのだと思います。

今ようやく、大学のキャンパスで勉強できるようになって感じたのは、ＩＢでの経験が貴重だったということです。例えば、課題の提出に関しては、教授に直接、聞きに行くといった積極性が大事です。もともと自分は内気なタイプで、前に出るのがすごく苦手でしたが、IB ではグループディスカッションやプレゼンテーションの機会が多かったので、率先してディスカッションを進めるように努めていました。この積極的な姿勢が大学でも役立ちました。コミュニケーションの面でもTOKで学んだ「どうすれば、他の人に分かりやすく説明できるか」を心がけています。大学には CAS に似た学外活動もあります。授業だけで精一杯の学生たちがいる中で、自分は趣味などの時間や空手、アルバイト、茶道などの時間も作っているので、これもＩＢのタイムマネジメントの経験からできたことです。

海外で学んだ知識や経験を、日本の高齢化社会で問題となる認知症の分野で活かしたい。

私の父は義肢装具士で、母はヨガを教えていて、小さい頃から医療に興味がありました。小学校の時に脳外科医の福嶋先生が、患者さんを思って新しい手術方法を考案されたという取材を見た時に、本格的に医療を学びたいと思いました。中でも、再生医療に携わりたいと考えています。

将来は大学院であっても、就職であっても、関連した研究ができるようになりたいです。今の段階では日本で研究したいという思いも持っていますが、教授と話し合いながら進路を絞っていきたいと思っています。来学期からは、教授の研究に携われることになり、名古屋市立大学の医学部の方が二人交換留学に来るので、その方々とも上手くコミュニケーションを取りながら、研究に取り組んでいきたいです。将来は、高齢化社会の日本で認知症などにどう再生医療を活用できるかなど、海外で学んだ知識や経験を日本に持ち帰りたいと思っています。

IB 生へのメッセージ

自分が卒業生という立場になり、IB は高いレベルの内容を学ぶだけではなく、CAS や TOK なども通して、グローバルな視点で様々な分野に興味を持つことができると感じます。IB を始める前からも、在学中も、校内の先輩方や・卒業生・先生方に「IB はとても大変なプログラムだよ」と言われ続けてきました。でも、「自分でもやればできるんだ」という自信を持てば、IB カリキュラム修了後の進学先の選択肢は地球規模に広がります。大変だと思いこまずに、色々な経験ができる！とポジティブに考え、ぜひ頑張ってほしいなという思いが強くあります。ほどよく自分のリラックスする時間も作って、自分にとってプラスになる事をたくさん学んでほしいと思います。

※取材＝文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局（武藤・金子・深井・瀧本）文＝クラー真美